

大豆「東北115号」の栽培法

(農試技術部・県北分場・県南分場)

1 背景とねらい

本県産大豆の需要は堅調に推移しているが、転作緩和や気象災害による不作などにより、生産量が大幅に低下している。大豆は土地利用型作物として営農上重要な役割を担っているが、栽培規模が小さく機械化が遅れていること、単収が低く年次による変動が大きいことなど課題が多い。大豆作を経営的に魅力あるものにするためには、低コスト生産による労働生産性の向上が重要である。

このような背景のもと、本年奨励品種に採用された大豆「東北115号」は安定性が高く良質の納豆用大豆であり、大型機械による収穫適応性を有する優れた品種である。そこで、本品種の優れた特性を生かすための栽培法を検討したので指導上の参考に供する。

2 技術内容

(1) 栽培基準

ア 目標収量

項目 (単位)	栽培地帯
	県下全域
目標収量 (kg/10a)	260~300

イ 好適栽培法

- (7) 播種適期は県中北部で5月中旬～6月上旬、県南部で6月上旬～下旬である。他の中晩生種と比べて適期幅は広いが、適期内では早播で多収が期待できる。
- (イ) 栽植密度は県中北部で20,000～25,000本/10a程度、県南部で15,000～20,000本/10aとし、圃場条件や播種期に応じて設定する。
- (ウ) 窒素施肥量は2～4kg/10aを標準とする。転換畑を含む沖積土壌や肥沃地では過繁茂を防ぐため少なめとし、ヤマセ常襲地帯や晩播栽培では初期生育確保のため多めとする。

項目 (単位)	栽培地帯		
	県北部	県中部	県南部
播種適期 (月・日)	5・15～6・5	5・15～6・10	6・1～6・30
栽植密度 (本/10a)	20,000～28,000	18,000～24,000	15,000～20,000
栽植様式*1 (cm)	70×7～5	70×8～6	70×10～7
播種量*2 (kg/10a)	2.5～3.5	2.3～3.0	2.0～2.5
N施肥量 (kg/10a)	(2～)4	2～4	2(～4:晩播)

注) *1: 畦幅×株間 *2: 百粒重12gとした場合

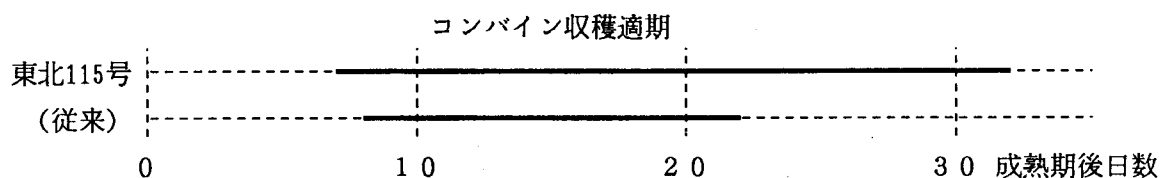
ウ 期待生育量

主茎長 (cm)	m ² 着莢数 (莢)	百粒重 (g)	小粒歩合*3 (%)
60～100	800～1200	10～13	50～80

注) *3: 粒径5.5～6.1mmの子実の重量歩合

(2) 大型機械による収穫技術

- ア 本品種は機械化適応性が高く、豆・ソバ用コンバインまたは汎用コンバインによる収穫は、高能率（作業速度 0.60m/s）、高精度（損失粒 1.6%、損傷粒ほとんど無、回収率98.4%）でできる。
- イ 茎葉水分の低下がすみやかである本品種は、成熟期から1週間目以降をコンバイン収穫時期（茎水分50%以下）の目安とする。収穫時間は露の切れる日中とし、晴天の日を選ぶ。
- ウ 裂莢はしにくく収穫可能期間は長いですが、年次によって品質低下が懸念されるので、収穫晩限は成熟期後約1カ月を目安とする。



3 指導上の留意事項

- (1) わい化病やモザイク病による減収を防ぐため、アブラムシ防除や種子更新を徹底する。
- (2) 連作を避け、ダイズシストセンチュウ発生圃場では4~5年間は寄生作物の作付けをしない。
- (3) 本品種は最下着莢位置が高く、茎葉水分の低下も早いことから汚損粒発生の危険性は低いですが、土の取り込みを避けるため刈高さには注意する。

4 試験成績概要

コンバイン収穫を核とした栽培実証試験（農試本場，平成6年）

①耕種概要

播種期（月・日）	5・25
畦幅×株間（cm）	70×10.4
施肥量（NPK;kg/a）	0.4-1.8-1.3

②収穫期

成熟期（月・日）	10・1
収穫期（月・日）	10・25

③供試作物条件

主茎長（cm）	60.1
最下莢高（cm）	8.5
倒伏程度	無
茎葉水分（%）	17.6
莢水分（%）	11.7
子実水分（%）	18.3
子実重（kg/a）	28.8

④収穫作業能率・精度（Y社CS-21）

作業速度（m/s）	0.60	
刈高さ（cm）	11.6	
全穀粒の内訳	穀粒（%）	98.3
	損傷粒（%）	0.1
	小計（%）	98.4
	頭部損失（%）	1.4
	脱穀選別（%）	0.2
	小計（%）	1.6
	合計（%）	100.0
穀粒	完全粒（%）	98.2
	傷粒（%）	0.0
	砕け、潰れ粒（%）	0.0
	莢付粒（%）	0.0
	病虫害粒（%）	1.2
	しいな（%）	0.5
	夾雑物（%）	0.0